

生田キャンパス周辺の 歴史と自然 を訪ねて



『育友』87号(1997年12月発行)

第16代専修大学学長在職中に急逝した故矢野建一先生が、文学部助教時代代会報『育友』(87号、1997年12月発行)に寄せた原稿「生田校舎周辺の歴史と自然」。歴史が専門の矢野先生ならではの知的散策の案内に従い、向ヶ丘遊園駅から大学までの道のりを、ときに大きく横道に逸れながら歩いてみました。

故矢野先生の23年前の原稿を頼りにキャンパス周辺を探索

多摩丘陵の上にあるキャンパス。矢野先生の原稿はまずこの立地についてこんな紹介で始まる。

数年前、受験生を対象に専修大学のイメージについてアンケートをとったことがある。その際、最も多かったのが「山登り」という回答であった。たしかに生田校舎は多摩丘陵のなかでは最も高台に位置し、1号館屋上に設置された三角点で標高95.2メートルもある。向ヶ丘遊園駅との比高差は、じつに70メートル以上に達し、「山登り」は大袈裟だがピクニック以上の厳しさであることは間違いないようだ。学生が「心臓破りの坂」と称する一番急峻な箇所にはエスカレーターを設けては、という話が年中行事のように浮かんでは消え、消えては浮かびする所もここにある。

「坂道にエスカレーター」とは奇抜とも思えるが、これはすでに実現している。2008年に完成した10号館内の1階から4階まで伸びるエスカレーターを利用することで、学生たちはこの「心臓破りの坂」を登らずに正門までたどり着ける



↑生田キャンパス正門へと続く坂道



↑10号館の1階から4階へと続くエスカレーター

ようになっているのだ。その点、今の学生は当時の学生よりも「専大＝山登り」のイメージは薄いかもしれない。

さて、向ヶ丘遊園駅から生田キャンパスまで、矢野先生の案内に従い辿ってみよう。

向ヶ丘遊園駅南口を降り最初に渡る「二箇領用水」は、水不足に苦しむ稲毛・川崎の二ヶ領の農民によって江戸時代の後期に開鑿された灌漑用の人工河川である。多摩川上流の大丸村に取水堰をもうけ、小田中まで全長11.8kmにおよぶ難工事であった。毎日何気なく渡っているこの川にも、稲毛・川崎の農民の長い水との苦闘の歴史が刻まれていることを知る人は少ないようだ。また、いまはコンクリートで覆われ、生活や工場用雑排水のための下水道と化しているが、五反田川との合流点あたりでは、多摩川から産卵のために遡上するコイやヘラブナの姿を見ることができる。急速に進む都市化の波のなかで、自然の確かな営みを確認し、ホッとす

ることのできる数少ない場所の一つである。

コロナの影響さえなければ、日々学生たちが歩いている川沿いの道だ。二箇領用水と五反田川との合流する辺りで川を見下ろす。矢野先生の記述の通り、悠々と泳ぐコイがいた。カモの群れも川面に遊ぶ。

さて、ここから少し足を延ばし、生田緑地の長者横穴古墳へと向かう。大学の宿泊施設でもある生田研修館のすぐ近く。草木に囲まれひっそりとした生田緑地の入り口から、山に足を踏み入れ、坂を上ると、ほどなく、かがんでようやく入れるほどの穴倉を発見。矢野先生はこう解説する。

岩肌を穿った数基の横穴（長者横穴古墳）が見えてくるはずである。江戸時代の人々は、これを「長者穴」と称していたが（図1参照）、明治時代に来日したアメリカ人教師で大森貝塚の発掘で知られるモース（Morse, Edward Sylvester）は、



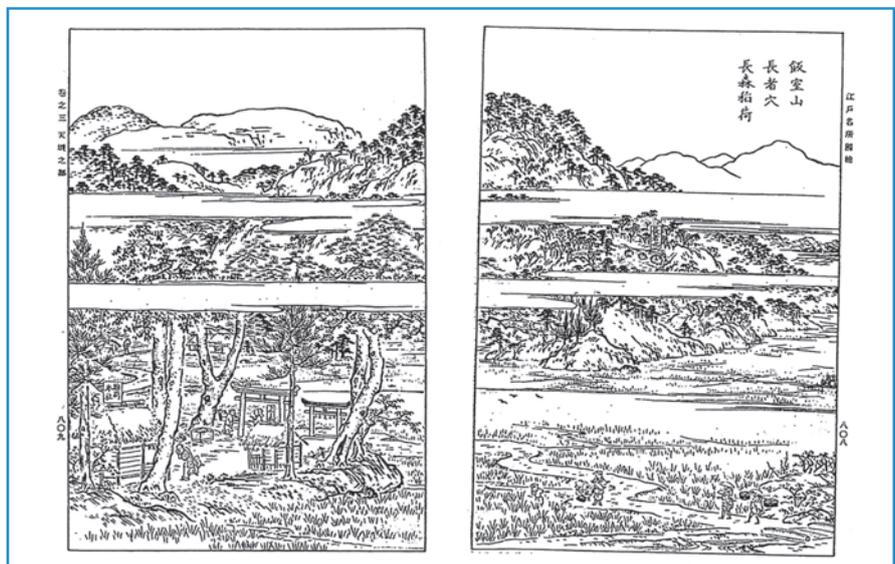
↑五反田川（左）と二箇領用水の合流地点



↑生田緑地入り口



↑大きく肥えたコイが泳ぐ



→図1『江戸名所図繪』長森稻荷より長者穴を望む

これらをアイヌ神話に登場するコロボックル（アイヌ語で落の葉の下の人々＝こびと）の穴居住宅と考えたという。ロマン溢れる学説だが、現在では7世紀に多摩丘陵の谷戸の開発をつうじて力を蓄えた村落首長達の墓と考えられているようだ。（中略）古代に生きた人々が死後の世界をどのように考えていたかを知る貴重な資料である。なお、横穴は長い年月風雨に曝されてきたために、天井や壁面の風化や劣化が進行し、落盤や崩落のおそれがある。決して横穴のなかには入らないようお願いしたい。

夏草に覆われわかりづらいが、3～4mおきに穴が口を開けている。穴倉を凝視しても真っ暗で、奥がどこまでかは不明。気にはなるが、先生の忠告に従い、見るだけにとどめておこう。

再び通学路へ。キャンパスへの坂道の始まりにお目見えするのが韋駄天社の鳥居だ。道を挟

んで相對するように廣福寺がある。どちらも歴史は古い。

『江戸名所図繪』（図2参照）によれば、廣福寺は、全山に12余の堂宇を擁し、春には桜の名所として近隣の人々で、賑わったとある。また、韋駄天社（いだてんしゃ）は行路安全を祈る神社として知られるが、廣福寺の観音堂にも韋駄天神の神像がまつられている。すなわち、廣福寺も韋駄天社も行路安全祈願の対象という共通の性格をもっていたのである。おそらく、両所が江戸近郊の名所となったのは、近隣近在の人々の信仰もさりながら、津久井道を往く旅人たちが行路の安全を祈りつつ、ひとときの休息を求めて立ち寄る場所として知られるようになったからであろう。

廣福寺の山門をくぐる。本堂の時を経た風合



↑ 23年前撮影の長者横穴古墳



→ 長者横穴古墳



↑ 韋駄天社の鳥居



↑ 図2 『江戸名所図繪』廣福寺・韋駄天社と樹形山。津久井道は現在と変わらないが、全体にやや誇張して描かれている。



↑ 廣福寺の本堂

い、苔むした庭石の緑に癒される。さらにここから、「廣福寺から裏手の急峻な小径を尾根伝いに登ると柵形山に至る」との矢野先生の記述に従い足を延ばす。標高 84 m の山頂にはかつて柵形城があった。鎌倉時代の武将、稲毛三郎重成の居城というのが通説だが、矢野先生はこれに異を唱えている。

この柵形山は典型的な中世前期の城郭で、かの稲毛三郎重成の居城とする説もある。しかし、『小田原記』には、永禄 12 (1569) 年の武田信玄による小田原攻めの際、当地の横山式部少輔弘成が北条方に与力して、柵形山々頂に壘を築いたとある。また、その報復として甲州軍は稲毛十六郷に火を放ち、このあたり一帯を焼き払ったとも記されている。こうした点から舁形城は、稲毛氏の居城というよりは、稲毛十六郷の庄民等の緊急避難のための城、いわゆる「逃げ



↑柵形山へ向かう遊歩道



↑柵形山の展望台

込み城」として築かれたと見たほうがよさそうだ。いずれにせよ、多摩丘陵の地形を巧みに生かした堅固な構造となっており、北東側は丘陵の断崖、北西側は丘陵に深く切り込んだ溪谷によって周囲と厳しく隔てられている。

柵形山の山頂も生田校舎も、多摩丘陵のもっとも高みに位置する。都心からすぐの場所だが、豊かな自然が残り、季節ごとの眺望が美しい。矢野先生はこの景色を手放しで称賛している。

柵形山や生田校舎からの眺望は近隣に比肩するものがない美しさである。春の桜、芽吹き頃の萌える若葉、秋には山々を織りなす紅葉、そして晩秋や初冬の空気の澄んだ日には、遠く浅間山の冠雪を望むこともできるという（この点は未確認）。「山登り」さえ厭わなければ、生田の山径は、四季折々、時々刻々、さまざまな相貌を見せてくれるはずである。

23 年前の原稿を頼りに道を歩いてみた。当時と変わらぬ風景に出会い、生田キャンパスの周辺の歴史と自然を改めて知る散策となった。原稿の最後、矢野先生はこう締める。

是非、学生諸君とともに生田の山径を回りながら、語らいの一時をもってみてはいかがであろう。すくなくとも「親子の断絶」の解消に役立つことは間違いないようだ。



↑柵形山展望台から北東方面の眺望